

「クローン病手記」匿名希望 21歳

2014年6月20日

1. クローン病と診断されるまで

自分がクローン病と診断されたのは19歳の冬である。それまでは自分のことをただのちょっと他人よりおなかの弱い人間と認識していた。小学生時代は紫斑病という腎臓病を1年生の頃に発症し、1か月程度入院生活を送ったが、その後は運動も好きで活発な生活をしてきたため、とくにからだやおなか弱いという認識はまだなかった。おなか弱いのを理解し始めたのは中学生時代である。中学生時代は主に晩御飯を食べている途中でおなか痛くなった。しかしそれも10分くらい休憩すれば食事を再開できたし、10分で治らないときはお風呂に入っておなかをあたためれば治ったので特に気にすることはしなかった。高校生時代はそれに加え、よく部活の前におなか痛くなった。というのも先とあまりよい関係が築けていなかったのもストレスを感じたからだろうと思う。また1年の頃の血液検査で貧血が見られ、(それまでも見られていたのですが)おなか弱いのもありいい機会だと思って内科に診察を受けに行くことを決めました。診察を受けてみると、貧血も深刻視するまでもないと言われ、それでも気になるのなら直腸検査、胃カメラでもしてみますかと言われたので両方受けることを決めた。直腸検査の結果は異常なしだったが、胃カメラで3つの異常が見つかった。3つの異常とは、軽度の胃炎、軽度の食道カンジダ、ピロリ菌である。食道カンジダ、ピロリ菌は飲み薬を処方され、それを飲んですぐに治療が完了した。胃炎は軽度なので治療は病院では行わずに終わった。またそれ以前は月1回、もしくはそれ以上のペースで食事時の腹痛に襲われていたが、それ以降年2、3回程度になったため、食道カンジダもしくはピロリ菌によるものだったのだろうと思っていた。依然として部活前におなか痛くなることはあったが、先輩が卒業後はそれが全くなり、これはストレスによるもので自分は過敏性腸症候群だったのだろうと自己完結していた。そして大学に入学して冬まで腹痛は嵐の前の静けさのように一度も来なかった。2月の春休みイタリア旅行に行き現地で40度の熱、腹痛、下痢を発症。現地の医者に行き胃腸かぜと診断される。何も食べずにスポーツドリンクだけでしのいでいると少し体調回復するが、そこで体力を戻そうと食事をするが、また腹痛と下痢が続く。飛行機の日はおなかの体調も悪くなくなんとか帰国した。それから数日間、ご飯を食べるたびに体調を崩していたが、ある日40度弱の熱が出て、病院に行く。検査を受けるとクローン病と診断され緊急入院と手術をすることが決まる、あと少しで敗血症というところだったらいい。

2. 二度の手術・入院

先の手術では小腸まわりの膿を除去したがその膿が出てきた穴は特定できず小腸を切断するまでではないという判断で小腸を切らずに終わった。またそこで小腸が狭くなっている(狭窄)とも言われた。そしてそれから入院生活が始まると同時に病気の説明を受ける。「この病気は一生治らない、食事制限も一生まわりつく。」そう説明されたとき、完全に感情が止まり、他人事のように「ふーん。」としか思っていなかった。食事制限は、エレンタールはおいしいと感じるフレーバーも多かったし、野菜や魚を食べられ、お菓子などはもともと食べなかったのになんとかやってけるとは思ったが、「好き嫌いせずになんでも食べ、運動もして、飲みすぎたりはしたものの比較的健康的な生活を送っていた自分がなぜ」とは何度も思った。入院中は一日ペンタサを6錠、エレンタールを2袋処方された。入院中の症状は下痢、軟便、発熱だった。また症状も軽かったのでレミケードを始めるのはぎりぎりまで先延ばしにしようと考えていた。この頃に母に松本医院については聞かされていたが、手記を読んだり「2ちゃんねる」を見たりした結果どうもうさんくさいと思いきや受診を決めきれなかった。そして退院の日がきた。待ちに待った退院で、退院した日には外の景色を満喫した。その晩、退院祝いでネギトロ丼を食べた。翌日、熱を出し、病院に行くと非常に高い炎症値が出ていて二度目の緊急入院と手術が決まった。二度目の手術で、小腸を切除し穴(穿孔)があることを確認した。その後も一度目の入院と全く同じ症状、処方だった。自分は手術を二度もしたものの普段の生活に支障をきたすような大した症状もなく、駄目だったらそのときはそのときだという軽い気持ちで松本医院を受診することを決めた。二度目も同様に退院。退院後は食事も気を付け、そして松本医院を受診に行く。

3. 松本医院

松本医院の最初の印象はお世辞にもいいとは言い難かった。漢方の何とも言えない独特な匂いが印象的だった。松本先生の印象もよくなかった。自分のことを陰気と言ってきたり、我慢するから病気になったとか言われたり、ズバズバ言うタイプで自分の苦手なタイプだと思った。しかし、普段から冷めているところもあり、なんでも自分が我慢するのが処世術で、直したいと思っていたのでいい機会だと思いでできるだけ明るく我慢しないように生活してみることにした。そのおかげか何回目かに受診した時には明るくなったと言われ、うれしかったものである。病状については正直もともと軽かったため、下痢はほぼなくなり軟便の頻度も減った。食事については、何でも食べてよいと言われたが、手術直後ということもあり鶏呑みにせず最初のうちは消化の良いもののメインで食べ、数か月かけてなんでも食べるようにしていった。

4. 現在

現在は松本医院にかかり始めて1年ほどであるが、完全に自由な食事をしていても体調は安定している。症状は軟便が週の半分くらいで、下痢は月に一度あるかないかくらいである。治ると便秘気味になってくるらしいがまだそこまではいっていないのでもう少しの辛抱だろうと思う。

5. クロウン病や松本医院について思うこと

まずクロウン病と診断され、パンフレットを読まされたが、原因不明の難病、完治はしないと書かれていた。しかしよくわからないからネットで調べた。そこで松本医院のHPを見つけ、そこには理論や手記が書いてあった。しかし穿孔とか狭窄とか痔瘻とかNK細胞だとか普段見ることのない、また意味も調べて初めて知るような単語がいちいち出てきて、診断されてすぐのそれらに見慣れていない頃はそれがなにかいちいち調べなくてはならず、正直わざわざ難しく書くことでそれっぽく見せようとしている悪徳商法ではなかろうかと思っていた。それでもそこで希望を捨てずにひとまず松本医院に行ったので、自分はあそこでいい道を選ぶことに成功したのだと思う。

松本医院に行ったらこの病気を作り出したのは他にもない自分自身だとか言われ、相変わらずなにをうさんくさい宗教じみたことを言ってるんだと思った。しかし、そこでよくよく昔のこととかを思い出すと、自分は小学生の頃野球の練習にほんとは行きたくない時期があり、その頃はよくほんとに熱が出て行かなくてよくなったり、また行かなくてよいと決まった瞬間に気が楽になって体調が治ったりしたものである。誰しもこういう経験があることを思い出してほしい。病は気からというのはほんとにその通りなんだと思った。

あきらめることなく、明るく、自分に正直に生きることが大切だと思った。そのきっかけをくれた松本医院に感謝している。